

日本におけるグレアム・グリーン研究小史

On the Assessment of Graham Greene in Japan

岩崎正也

Masaya Iwasaki

グレアム・グリーンが1991年4月3日に亡くなり、その作品が出揃ったいま、グリーン研究は生涯の伝記的な事実を見通したうえで、全作品を検討する時期に入ったといえる。これを機に筆者は「日本におけるグレアム・グリーン書誌」を作成するため、資料の調査・収集を始めた。書誌完成までのおおまかな手順は次のとおりである。

1. 国会図書館で『明治大正昭和 翻訳目録』や『雑誌記事索引』などの書誌からグリーン文献の書誌事項をコピーまたは、手書きにより入手する。
2. グリーン著作の翻訳を出版した新潮社、早川書房、集英社、中央公論社や『英語年鑑』を出している研究社へ行き、実物を調査する。
3. 国会図書館で入手した文献リストをワープロに入力する。
4. 入力したリストに基づき、長野大学付属図書館を通してそれぞれの大学、研究機関、国会図書館などに資料の複写請求をする。
5. 複写請求により送付されたコピー資料の書誌事項を『日本目録規則 (1987年版)』(日本図書館協会)に従い、第二水準まで記述し、ワープロに入力する。
6. 3で入力したものを著者別に編集し、すべての著者にリストを送り、資料の追加を依頼する。
7. 新たに判明した資料を複写請求する。
8. それをワープロに入力する。
9. ワープロで書誌の原稿を作る。
10. 出版する。

以上の手順に従って、1992年の夏、国会図書館で文献リストを収集(1)し、1993年春、リストをワ

ープロに入力(3)したあと、93年度は長野大学地域研究調査助成金を使って、出版社へ実物の調査(2)で上京するとともに、長野大学図書館を通じて複写請求(4)を始めた。これからは(4)の作業を継続する予定である。

日本で一番古いグリーン文献は、いまのところ1948年12月に発行された最所フミ「グレアム・グリーン著——『事の神髄』『書評』第3巻第12号(日本出版協会編集室)であり、最新の文献は1994年6月に出版された宮野祥子『グレアム・グリーン作品研究——〈イノセンス〉と〈ローグ〉と——』(学書房)である。この間に45年の歳月が流れ、筆者の調査によると、790点の文献が著わされている。この内訳は書誌18、著書9、著書の一部52、研究論文681、書評12、研究書の翻訳6、研究書の一部の翻訳12である。この他にグリーン著作の翻訳、新聞記事、おもに大学で使用される教科書テキストなどを加えれば、数量は1,000を超えると予想される。

最所フミの「グレアム・グリーン著——『事の神髄』」は *The Heart of the Matter* (1948) の書評であり、「この小説は、最近英米の文壇に大きな刺激を与えている文字通り問題の作品である」と書き出して、その特徴を、近代文学のテーマである、個人の内的な苦悩、葛藤を描き、またストーリーを犠牲にせずにその苦悩を外的情況の巧妙な叙述により描いていると評価する。

英文学研究者による最初の論文はなにか。『グレアム・グリーン——20世紀英米文学案内』(研究社、1971年)によると、たぶん福原麟太郎が1949年4月発行の『英語青年』に R.F. の署名で書いた「現代の英国小説」であるという。これは Henry Reed の *The Novel Since 1939* (1947)

の紹介であり、*The Power and the Glory* (1940)を最高の傑作としている。しかし1947年4月発行の『英語青年』には富原芳彰が F.H.R. の署名で書いた「英米消息」の中でグリーンについて触れている。「英国文壇の現況」という見出しの記事は *New Republic* (Dec. 2, 1946) に掲載された Philip Toynbee の 'The English Literary Scene' の紹介であるが、現在活躍中の Forster, T.S.Eliot に続く作家群として Auden, Isherwood, Graham Greene, Evelyne Waugh などを挙げ、Greene の悲観的、人道主義的なところと、Waugh の humoristic などところが面白い対照を見せていると記す。その後、1949年の福原の記事を経て、1950年に同誌上に3回紹介される。8月号では成田成壽が *The Spectator* の春季特別号と前年の Christmas Number の記事を引用、紹介して、アメリカでは Greene はたんなる暇つぶし以上の作家として見られ、*The Heart of the Matter* が重視されているという。またフランスでは Mauriac との関連で *The Power and the Glory* が全員に読まれたという。また同じ8月号には K.T. が「戦時中のイギリス小説」の中で Henry Reed の *The Novel Since 1939* の紹介として Greene を8行にわたって取り上げ、「スリラーの骨髄に、人生と性格の衣裳をつけ、それを象徴的な高さにまで引上げている」と述べる。2回目は9月号で富原芳彰が F.H.R. の署名で *Transition* の編集者 Georges Duthuit を引用して、フランスでは Mauriac の後継者として Greene が受け入れられていることをまとめた。3回目は11月号で、成田成壽が N.R.T. の署名で Gilbert Phelps の 'The Teapot and the Samovar' (*Britain To-day*, June) を紹介して、Greene にはロシア文学の影響があり、Greene と Elizabeth Bowen を戦後のイギリス文学を代表する作家と書く。次に同誌1951年3月号で初めて英文学関係者による論文が登場する。上田勤は「Graham Greene —— 政治と文学 ——」という3頁にわたる論文の中で *The Man Within* について精緻な心理描写、巧妙な話術などを示すだけでなく、若々しい浪漫的な趣きもあり、勧めたい傑作であると長文の論評をしたあと、*The Heart of the Matter* と *The Power*

and the Glory について詳しく述べ、前者に現われるアフリカの風景が象徴的に用いられていることを指摘する。続いて1951年7月号で成田成壽が N.R.T. の署名で *World Review* 2月号の紹介として、流行している作家の中に Greene を入れている。1952年9月号ではグリーン特集が行われ、5人が論文を寄せている。成田成壽は Greene の作品がどれもみな異常な性格や、頽廃、殺人を扱うのは、人間の罪に対する彼の意識の激しさによると推定したが、*The End of the Affair* の一人称による語りの技法の指摘は重要である。吉田健一は Greene が人間に対し切実な関心を寄せている点で、カトリック作家であることは二の次であるという。中橋一夫は詳細な伝記を試み、Greene の生い立ちは作品の世界へと発展する要素を含むと記す。本多顯彰は *The Power and the Glory* の訳者として、ホワンの殉教には違和感をもつが、ウィスキー司祭の殉教には人間的な説得力があると書く。加納秀夫は R.V.W. の署名で、不安の時代を Age of Frustration と言い換えて、*The End of the Affair* の核心を分析する。この頃からグリーン論文の数は増えてくるのだが、日本の英文学関係者たちが注目する以前に、映画評論家や作家たちが作品を読み、論評しているという点にグリーンの人気の特徴があり、日本でのグリーンの評価の特異性があると私は思う。

戦前にはグリーンに関する記事はないのだろうか。いまのところ、筆者の調査では書かれたものは見当たらない。しかし日本の映画批評家たちがすでに戦前からその作品を読んでいたという。飯島正『自伝的エッセー——ぼくの明治・大正・昭和』(1991年)によると飯島は1930年代に植草甚一や双葉十三郎とともに G.G. クラブを結成してグリーンを読み出した。そして *A Gun for Sale* (1936) の翻訳を始めたものの、途中で止め、戦後の1953年、舟田敬一と共訳で『拳銃売ります』を早川書房から出版する。また江戸川乱歩は『雄鶏通信』の1947年11月号でグリーンの *The Confidential Agent* の読後感として、『内部の人』と同じように飄々としたファンタジーを感じたと記し、12月号では *Brighton Rock* を心理的スリラーの分類に入れ、ピンキーの心理的恐怖感に比べればその

残虐さは物の数ではないという。

グリーンズの翻訳の出版はいつ始まったか。最も早いのは *The Power and the Glory* の本多顯彰訳『逃亡者』で、1951年1月、新潮社から出された。次に同年2月、遠藤慎吾訳『第三の男・転落した偶像』が早川書房から出版される。続いて同年12月、伊藤整訳『事件の核心』が新潮社から、1952年5月には *Brighton Rock* の丸谷才一訳『不良少年』が筑摩書房から出される。このように以後翻訳だけでなく論文も大量に発表されるようになった。

日本で最も早くグリーンを紹介したのはだれか。その一人は西脇順三郎であろう。グリーンについてまとめた記事ではないが、戦前の著作の中でグリーンの名を記述しているのは注目に値する。1934年、第一書房出版の『現代英吉利文学』のⅢ章4節で第一次大戦以来書いている作家のなかに *Graham Greene* を挙げている。

一方、グリーンズの書誌は1930年代に4点作成された。まず1961年7月に筑摩書房から出版された世界文学大系第60巻『モーム、グリーン』の月報に掲載された前川祐一の「研究書目・参考文献」である。24点の論文などが記載されている。次に山形和美による1962年に出された『比較文学』第5巻の「日本におけるグレアム・グリーン文献」で、201点を収録した労作である。著作43点、関係文献125点、講演11点、その他として、テキスト10点、映画6点、映画評論5点、目録1点を含む。1963年、山形書誌に訂正、追加する目的で清田昌弘が *Traveller* 第19号の『日本におけるグレアム・グリーン文献』補遺』の中で著作7点、

関係文献77点、その他4点、計88点を補足した。1971年10月出版の筑摩世界文学大系第79巻『ウォー、グリーン』の月報に前川祐一は51点を記載した。

昭和30年代、40年代にはグリーンは日本で人気を呼び、翻訳、研究はたいへん多くなる。『日本における英国小説研究書誌』（風間書房）によると、昭和40年から56年までの研究論文の点数ベスト10にグリーンが入っていることから、その人気が窺われる。これまでに日本で個人によって書かれたグリーン研究書は5冊ある。

山形和美『G. グリーン——呪縛と幻視』（冬樹社、1977年）。

安徳軍一『G. グリーン文学の核心——解釈ノート——』（東京教学社、1982年）。

渡邊 晋『グレアム・グリーン論——神・人・愛』（南雲堂、1988年）。

山形和美『グレアム・グリーンズの文学世界——異国からの旅人——』（研究社、1993年）。

宮野祥子『グレアム・グリーン作品研究——〈イノセンス〉と〈ローグ〉と——』（学書房、1994年）。

このうち山形の『グレアム・グリーンズの文学世界』は伝記的事実を視野に入れたうえで、グリーンズの全作品を再検討した点で海外も含めて最初の著作といえるだろう。

（いわき まさや 教授）

（1994. 7. 27受理）

（これは1993年度長野大学地域社会研究調査助成金による報告である。）